



# 錦帯橋の誕生

し、諸説紛々とする日本三名橋や三奇橋に不動で名を連ねることも、いかに愛されている橋であるかがわかります。

しかし、この橋は決して美しさや奇をてらって架けられたわけではありません。その姿は、木や石といった自然の材のみをもって、困難な架橋条件を克服するために叡智を絞って造られた構造美の結晶なのです。

## 岩国吉川家

錦帯橋の生みの親は、岩国を治めた第三代領主・吉川広嘉と伝えられています。岩国吉川家の始祖・吉川広家は、西国の雄・毛利輝元と従兄の間柄であり、もともとは毛利の支藩で出雲国富田12万石を治めていました。

慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いにおいて、家康に次ぐ実力者で

あった毛利輝元は、石田三成によつて西軍の大將にかつぎ出されました。

この時、外交手腕にたけた吉川広家は、三成が天下人の器ではないことを見抜き、東軍勝利を確信していたため、家康に内通して主家である毛利の安堵を取り付ける一方で、戦場では毛利軍の動きを封じて東軍勝利に貢献しました。

広家の働きで、毛利家は石田三成と共倒れの危機をまぬがれたものの、120万石の大藩から周防・長門37万石に大減封されてしまい、これ以後、毛利家は吉川家を裏切り者と恨み、幕末にいたるまで支藩として決して認めぬ立場をつらぬきました。こうして出雲から岩国3万石へ減封された広家は、小さいながら一国一城の大格であったにもかかわらず、あくまでも毛利家の家臣という屈辱的な扱いをうけることとなったのです。

## 暴れ川

錦帯橋が架かる錦川は、山口県最大の大河であり、山また山を縫うように流れているため、美しい名前とは裏腹に、大雨となれば水が溢れて河口付近の岩国を濁流が襲いました。岩国吉川家は、錦川の右岸に治所をおく一方で、城下町は左岸に広がっていたため、両所をむすぶ橋

なりました。

そして同年6月、独立の前で『西湖遊覧志』を手に取った広嘉は、一枚の絵図にくぎ付けとなり、次の瞬間、パーンと机をたたいて「われ会心の奇処を得たり！」と叫んだといひます。そこには西湖に並ぶ小島の一つ一つが、アーチ橋で結ばれている様が描かれていました。河幅が広ければ、川に島を築けばいい。錦帯橋が創案された瞬間でした。

この時の様子は、広嘉が命じてつくらせた『西湖遊覧志』の写本の序文に記されています。これが独立自身の筆によること、また『西湖遊覧志』の図が、錦帯橋を連想させるに十分であること。さらには、そこに描かれた西湖の橋が16世紀中期以降に錦帯橋と呼ばれていたことなどから、この説がもつとも確からしいと考えられています。名君は病氣も功名とする運氣があるといふべきでしょうか。

## おわりに

この9年後の延宝元年(1673)、錦川に4つの石積み橋台を築き、流れの緩やかな両岸側が普通の桁橋で、急流部の中央3径間は刎橋を応用した木造アーチという世界に類をみない構造の錦帯橋は完成しました。創建の翌年に、流失の憂き目を見たものの、その後すぐに改良再建され、



錦帯橋

## はじめに

山口県の南東部に位置する岩国には、世界に誇る名橋、錦帯橋があります。最も美しい橋はなにかというアンケートをおこなえば、必ず上位に食い込むことでしょう。

は必要不可欠でしたが、河幅約200mの暴れ川はやすやすすと架橋を許してはくれませんでした。明暦3年(1657)に二代領主の広正が架けた横山橋も、わずか2年で流されてしまい、その後は渡船をもつて河をわたる不便を君臣ともに強いられ、いつしか流されない橋を架けることは、吉川家の悲願となっていたのです。

## 吉川広嘉

横山橋が流された後、広正が隠退を表明したため、架橋の悲願は三代領主の広嘉に引き継がれました。英邁な広嘉は、架橋の苦心に労力を惜しまず、たとえば、江戸参府の帰りに回り道して甲斐の猿橋の視察を行ったといひます。また、生来病弱だったため、たびたび京都へ療養におもむいていましたが、後に錦帯橋を手がける御作事組の児玉九郎右衛門を御供に選ぶこともありました。御作事組とは、大工を担当する役職のことで、わざわざ彼を道連れにしたのは、当時の知識があつまる京都において、橋梁学の見聞を広めさせるためだと考えられています。

しかし、河幅約200mの錦川は容易な相手ではなく、橋脚を造れば流されてしまい、橋脚を用いない猿橋のような刎橋形式にしてもスパンに限度がありました。

## ヒントは「かき餅」?

錦帯橋の独特の姿は、このような難しい条件を克服するために生み出されました。この橋を見る人は、どのようにして奇抜な構造を考え出したのか、興味をもつたようです。たとえば、俗説には「かき餅」がヒントになったと伝えられています。ある日、広嘉が「かき餅」を焼いていると、プクーツと膨れました。箸で押さえても膨れ上がってくるので、ためしに4、5個ならべてみたところ、錦帯橋の連続アーチを思いついたといひのです。これが本当なのかわかりませんが、実際には広嘉の虚弱体質が錦帯橋の誕生に繋がったといひ次のような話が、もつとも事実に近いと考えられています。

## 独立禅師

寛文3年(1663)5月、京都から岩国に帰った広嘉は、療養もむなしく病状が悪くなり、ほとんど外出もできなくなりました。そんなおりに、長崎から黄檗宗の独立禅師が、広嘉の治療のために岩国へ招かれました。独立は中国からの帰化人で名医として名を馳せていたのです。寛文4年(1664)4月のある日、独立は広嘉と歓談し、故郷杭州の名勝・西湖について記された『西湖遊覧志』を話題にしたことから、広嘉の望みで長崎から取り寄せることと



しかし、こうした逆境は、得てして名君を生み出す糧となるようです。吉川家二代目の広正は、新田開発や紙専売制度を実施して領内の財政基盤を築き上げ、続いて寛文三年(1663)に三代目領主となった広嘉は、「三代目は凡庸」というジンクスを覆し、銅山の開発や抄紙業を興す一方で、文化事業にも尽力しました。そして、彼の業績で忘れてはならないのが、錦帯橋の創建でした。

以後、昭和25年のキジア台風によつて落橋するまで、吉川家の悲願のとおりに、実に276年間も流されることがありませんでした。その後、昭和28年に再建され、「平成の架替」を経て現在に至っています。

錦帯橋を訪れる観光客は後を絶たず、岩国の大切な観光資源となっています。すぐれた指導者の創案した二つとない建造物は、創建から340年も後の世まで、かつての領地を今でも潤し続けているのです。(文：江口知秀)



『西湖遊覧志』の挿絵(岩国徴古館「錦帯橋展図録」より転載)